View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

「待ちかね」られた物語
――『田舎教師』予告記事の考察

山本　歩

一、「予告」の存在感

田山花袋『田舎教師』(1)の刊行は明治四十二年十月である。「明治三十四五年から七八年代の日本の青年」(2)を描いたこの作品は、発表当時から青少年たちの感動を呼び、今なお花袋の代表作として認知されている。その青少年読者の中に、片岡鉄兵がいた。

片岡の「文学的紀行」(3)は、彼が昭和十三年四月、横光利一・川端康成と共に熊谷・行田・羽生、すなわち『田舎教師』の舞台を「巡礼」した旅について書いたものである。そのような旅に片岡を駆り立てたのは「読み終つて巻をおく能はず」と言うほどの作品への感動に他ならない。しかし気になるのは少年時代の彼が、「この書が田舎の書店に出るのを待ちかねて購い、貪るが如く読んだ」ことである。

片岡はなぜ「待ちかねて」いたのか。その理由を単に、彼が流通の遅延する地方（片岡の出身は岡山県である）にいたから、あるいは各所に広告が掲載されていたからだと合点するのは、恐らく充分ではない。同様に、「新声」に掲載された書評で「長い間予告もあり噂もあつた田山氏の田舎教師が漸く出来た」(4)とある「予告」も、広告や彙報

・雑報をのみ指すわけではなかろう。

次の事項も確認しておこう。十一月七日の読売新聞紙上の合評(5)において、「葛山人」は「成るべく日記中の人物から外れ出ぬやうにして、しかも日記中の文字の裏に主人公の心身の変遷を見破らうとした苦心も認められた」と『田舎教師』を評価した。一方、「XYZ」は「核略性の肺病になると尚一層此欲は燃えると云ふ事だが、此編には其れが見えない。之は推うに材料の日記を信用しすぎた為ではなからうか。ロマンチックなあこがれたがる偽り多き田舎教師が飾つて書いた所に欺かれはしなかつたらう。併し、其隠した所まで掘くつて貫ひたかつた」と不満げである。合評では一つの論点として、花袋の「日記」に対する態度が挙がっている。ここで言う「日記」とは『田舎教師』の主要なモデルとなった小林秀三の遺した日記である。やはり問題としたいのは、『田舎教師』が日記をもとに書かれたという事実が、既に情報として共有されていた点である。

発売が待たれていただけではなく、成立事情まで知られていた。これは、以前から雑誌「文章世界」上の記事で、繰り返し『田舎教師』のタイトルが挙がっていたからだと思われる。花袋本人が主筆を務めるこの投書雑誌において、事前情報が開示されていたことは興味深い。予告的記述が認められる記事は次の四つである。

・「九州より」（三巻十二号―四十一年九月）
・「秋の寺日記」（三巻十四号＝増刊「文章百話」―四十一年十一月）
・「梅雨日記」（四巻十号＝増刊「盛夏号」―四十二年八月）
・「インキ壺」（四巻十一号―四十二年九月）

さて、こうした記事の目的を、藤森清氏は「このテクストの読まれ方そのものを規制し、方向づけること」にあると考察、「周到に準備」(6)されたものと指摘した。大井田義彰氏は「意識的な戦略であったのかどうかはあきらかではない」としつつ、「事情を知る読者に、たえず物語の背後にある事実を想起させずにはおかないという意味で、この

小説の読み方それ自体にも多少は影響を与えていたにちがいない」(7)と述べている。ただし、両者とも、各記事を具体的に検討した論ではない。

拙稿は、記事が、作品に先駆けて読者となんらかの関係性を築くもの、という視点には概ね沿うが、やや切り口を異にしたい。そもそも、「影響」とは、一方的に押し付けられるものではないはずだ。影響されるための素地があるからこそ、言い換えれば片岡のような「山間の田舎町」に住む「我は真理の使徒なりと自惚れることで満身の創痍の痛みを忘れようと」(8)していた少年が待ち構える心性と響きあってこそ成功するのではないか。記事の背景となる事象、隣接する事情に目を向けて、予告的記述に込められた意義を考察したい。

次に、四つの記事を概観してみよう。

二、四つの予告的記述

・「九州より」

「九州より」の『田舎教師』関連記述は、「文章世界」上のトピックに相乗りする形で書かれたものであり、『田舎教師』の着想が如実に表れている。

耶麻渓はつまらなかつた。青の洞門も大したものではない。青から柿坂までも左程興を惹かない。羅漢寺などは俗中の俗、善男善女を威かす位なものだ。唯、君に報告したいことが一つある。故西萩花君の家に行つたことだ。

紀行文として書かれたものであるにも関わらず、冒頭から奇勝耶馬渓を「つまらなかつた」の一言で断じ、読者に「君」と語りかけ「報告」するのは「西萩花」のことである。西萩花（健太郎）は「文章世界」の熱心な投書家だっ

たが、明治四十一年六月に自死を遂げている。

以後、この記事の前半部は萩花の死と、地方青年の悲哀への感慨に占められることになる。

僕は此までにも田舎の青年の死といふことを考へたことは幾度もある。才を抱き志を抱き空しく田舎に埋れて了ふ悲哀は到る処にある。僕の書かけて居る『田舎教師』もさうした人間を書こうとするのだ。田舎寺の墓地の一隅の小さき墓石、其下に志を抱いた若い青年の銷せざる魂が眠つて居ると思ふと、僕は堪らない。僕だつて君だつて、一つ間違へば、そうした運命に邂逅さぬとも限らなかつたのだ。

小林一郎は西萩花を『田舎教師』のモデルの一人と捉え『もう一つの明治の青春　西萩花遺稿集』(9)を編んでいるが、「田舎の青年の死といふことを考へたことは幾度もある」という一文からは確かに、小林秀三ひとりをモデルに『田舎教師』が書かれたわけではないことが伺える。

さて、「文章世界」の投書家であり、西萩花とも文学上の同志として文通していた加藤武雄は、後年、自伝的小説『悩ましき春』(10)において、『田舎教師』に言及している。加藤をモデルとした「山岡」は、萩花＝「蘆江」の死に触れ、花袋＝「葉山華提」の記事（「九州より」とほぼ同文）を読み、次のような感慨を抱く。

それは、簡単な記述に過ぎなかつたが、崇拝する師の文章を通じて想像する、その逢はずに死んだ、懐かしい心の友の身後の消息は、彼の心に強い感動を齎(ママ)らずには居なかつた。而してまた「才を抱き志を抱き空しく田舎に埋れて了う悲哀は到る処にある。」といふ言葉に対しては、彼は自分自身を振りかえつて見ずにはいられなかつた。それは、死んだ蘆江に就いての言葉ではあるが、同時に亦、山岡彼自身に就いての言葉では無かつたか。華提が今、一つの哀史として綴りつゝあるといふ「田舎教師」の運命は、それは山岡自身の運命なのでは無からうか。

「崇拝する師の文章」という表現が目を惹く。「九州より」は単に、一般の小説家・紀行文家の文章としては認識され

ていない。「師」は文壇の中心人物にして雑誌を統括する指導者なのである。そんな人物が一投書家、一地方青年を「僕だつて」と対等視した「九州より」の一文は、極めて重い意味を持つ。そしてそこに紛れ込んだ「田舎教師」という文字を加藤は見逃していない。『悩ましき春』中の山岡がそうであるのと同じく、加藤は明治三十五年から明治四十三年まで、年齢にして十五歳から二十三歳までの間、故郷神奈川県の小学校で教職に就いていた。だから、詳述されない「田舎教師」の「悲哀」も彼にとっては自明のものであった。自明だったからこそ強い印象を与えたのである。すなわちここでは、花袋の言説はむしろ、地方青年の境遇をなぞり、既知の感情を触発するものだったと言える。

また、「九州より」は明らかに、現実の死者と、作中人物と、読者と、そして作者をも、横に繋げようという意図を持っている。ここに、萩花―「田舎教師」―読者―花袋、という回路が組み上げられる。これは後の関連記事を見ていく上でも重要な事項である。

・「秋の寺日記」

「日記」と題するが、随筆めいた作品である。寺の中から見え聞こえする田舎の風景を描写するところから始まり、やがて作者がそこで執筆生活を送っていることが明かされる。「寺」は太田玉茗が住職を務める埼玉県の健福寺、『田舎教師』に「成願寺」として登場し、花袋が清三の墓を発見した場所でもある。

寺に起居する作者の生活は楽しげであり、秋の深まりと共に、田舎の「水彩画のやう」な景色が描写される。その中に、『田舎教師』の話題は挿入される。

墓場に一基の自然石の墓がある。

『――之墓』と正面に書いてあつて、下に、生前辱知と刻んである。これが私が『田舎教師』に書かうとする

主人公だ。其主人公には、私は七八年前、此寺に来た時に逢つたことがある。（略）まだ其頃は書かうとも何とも思つてゐなかつた。処が、ある年の秋も暮れて、木枯の寒く吹く日、私は停車場から其墓場の近路を抜けて寺に来た。不図其墓が目についた。何うした加減か、『かうして年若く死んで墓に築かれて了ふ人もあるのだ』と思つた。胸があるものに触れたやうな気が為た。『親々と子供』の最後のハザロフの墓の処の一頁が歴歴と眼に浮んだ。平凡なる一田舎教師の死！　これに意味が無いだらうか。

友の主僧はこれを聞いて、預つて置いた其人の三年間の日記を見せて呉れた。かれに就いての性行逸事をも聞かせてくれた。それから勤めて居た小学校にも行つて見た。今ではかれは私の無二の親友である。『田舎教師』が出来上がるまでは、少くとも一日も私の胸を去らぬなつかしい友である。

「年若く死ん」だ小学校の教師をモデルとしていること、作者はその人物の日記を入手していることなど、『田舎教師』についての具体的な情報が開示されている。

「無二の親友」「なつかしい友」という表現も見逃せない。一「田舎教師」を対等視することは、類似した境遇に身を置く一部の読者に肉薄することにもなるからだ。ここでも先の回路、すなわち、「田舎教師」―読者―花袋が強化される。

今ひとつ、このテクストで注目しておきたい箇所がある。前半部に存在する次のような記述である。

ある自然石の墓碑があつて、文が刻してあるので、読んで見た。土地の医師の墓である。生れは仙台で、維新の時には志士として各藩を遊説して歩いたが、維新の後、此処に来て医師を始めて、病院を立てゝ、非常に此町の為めに尽したといふことが記してある。仙台の人がこの利根河畔の田舎町に来て、其町の為めに尽して、死んでからもかうして其町の人々から惜まれるといふのは面白いことだと思つた。故郷と他郷といふことを私は考えた。

前掲『田舎教師』関連記述と見比べてみる。同じ「自然石の墓」であっても、一方は「他郷」から来た偉人であり、一方は終始「故郷」に留まった「平凡」な青年である。この対比は、「田舎教師」の不遇を強調する効果を持つ。和田敦彦氏は『田舎教師』の特殊性を次のように説明している。

> 無名なのに碑が残る、何にもなっていないのに名が残る、というこのテクストの奇妙さはもっと意識されてよい。このことは作中の登場人物清三について言えるのみならず、『田舎教師』というテクスト自体についても言えることだ。つまり『田舎教師』は、無名の登場人物清三がテクストの中の世界で碑、名を残すとともに、この書物自体によって文字として名を残す。(11)

「平凡なる一田舎教師の死！　これに意味が無いだらうか」という反語表現に違わず、『田舎教師』は「無名」を「無名」のまま有意味にするテクストである。「故郷」から出ることなく、世間的には何らの事業も果たせないまま夭折した青年。そこに敢えて特別さや事件性を付加するのではなく、ただ固有の生として描き切ることが『田舎教師』の趣旨であったとするならば、「秋の寺日記」の墓碑の対照は、二種の異なった生について、二種の異なった価値基準から判断せねばならないことを暗示する、重要な記述だと言えよう。

・「梅雨日記」

「梅雨日記」は半ば『田舎教師』の執筆日記であると言える。「六月七日」から翌七月「十四日」まで――行田町取材から「百四十三枚目」（四百字詰原稿だとすると十三～十四章あたりか）までにいたる執筆の過程が開示されている。

この記事は増刊「盛夏号」付録の企画として書かれたもので、作家の「偽はらざる」日記を公開し、読者の創作者への興味を煽ると共に、日記文範とすることを目的とされていた(12)。しかし寄稿された日記はどれも読者の目を強く

意識したものであり、「偽はらざる日記をと期待してゐた私は、成夏号を見て失望した」（四巻十二号　四十二年九月「読者論壇」小松君栗「感じたまゝ」）「だまされたやうな気がした」（同　都筑省三「日記」）と読者の不興を買った。「梅雨日記」もその例に漏れず、やはり読者を意識した書き振りが少なくない。

予は執筆時間を一日三期に分つ。午前は八時より十一時、午後は一時より四時、夜は七時より十時、常に三時間を以て一期とす。されど毎日本町に出勤せざるべからざる身は、三期を完全に机に坐ること難し。大抵一期乃至二期なり。

と、わざわざ自分の習慣に言及する部分など、最たるものと言えよう。しかし、こうした記述は、今まさに書かれつつある『田舎教師』という制作物の存在感を際立たせる。「九州より」「秋の寺日記」はテクストの内容に触れているのに対し、ここではその実体化の過程が綴られる。小説がどのような者の手で、どのように作られるのか、それはもはや「日記」ではなく、小説作法とでも言うべきものである。

「九州より」「秋の寺日記」には、作者が作中人物や読者を対等視しようとする態度が表れていた。「梅雨日記」から伺えるのはそれに反し、地方青年たちとは大きく隔たった地位にある人物の姿である。

執筆と並行して、青山墓地での独歩一周忌（六月二十三日）、蒲原有明の来訪（二十五日）、龍土会への参加（二十六日）、病床の松浦辰男訪問（七月十四日）など、文学者との交流にも言及。一方で『文章世界』校了にも立ち会うという、主筆業務も話題に挙げるのである。「七月三日」には「仙子、『ひと夜』の作あり。予の一過読を求む。概して可なれど、説明的描写と描写的説明とにつきて未だ到らざるところあり。少しく語る所ありたり。」(13)と書いており、文章上の「師」としての姿も見せる。以上、この「梅雨日記」には花袋の小説家として以外の面も垣間見える。文壇内での付き合いや、編集者・雑誌の製作者としての立場、そして厳しい指導者でもあることが示されている。

投書家青年とは別次元の地位にある「田山花袋」。それを敢えて前景化するのは、先のような回路からの離反行為

であろうか。そうとばかりは言えない。元より、「崇拝する師」と見られる立場にある人物が、無名の一「田舎教師」を対等視する、という点にこそ密かなインパクトは期待されていたのではないだろうか。そもそも、ここで花袋を「有名」、読者を「無名」と考える価値基準こそ、『田舎教師』清三を「無名」のまま有意味にする際に取り払われなければならなかったのであって、「梅雨日記」が『田舎教師』の執筆日記であることは、『田舎教師』が花袋と読者の橋渡しを果たすべき作品であることの証左である。

花袋なる「有名」人が「無名」な「田舎教師」の物語を書いている、というところこそ、予告的記述が組み上げてきた回路の肝なのである。いったん、「有名」の者と「無名」の者の間に存在していた線引きを、別の価値基準によって消失させる。実際上の地位を獲得せずに、「田舎教師」として生きる「悲哀」を共有する者同士として、連帯できる。そうした『田舎教師』をめぐる目論見が、「梅雨日記」には強く表れたのではないだろうか。

・「インキ壺」

四巻十一号の「インキ壺」では日記の中から「天候と草花を記した処」を掲載している。二ページ近くに渡り引用を行った後、花袋は次のように述べる。

私はこの『田舎教師』の歩いた道、住んだ処、勤めた学校にも行つて見た。そして此日記につけてある頃、矢張同じやうにして野の花を採集したことがある。日の光と野の花と夕の雲と、それが何だか私とかれとの間に深い関係があるやうに思はれた。野の道を歩いて居ると、かれが袴をつけ麦稈帽子を被つて其処に居るやうな気がする。利根川の土手、寺の本堂、私は四辺の光景を見る度に、かれのことを思つた。

以降、花袋はこの体験から「心理を外物で顕はす」という手法への注目と、創作のための「踏査」の重視を述べている。小説作法的な話題へと転換していくのは、「インキ壺」が文章・小説指南の性格を持った不定期連載だったから

である。ここにおいて、花袋の記述が『田舎教師』を例として小説作法を指南する枠組みを持つことが明らかになる。

ただし結果から見れば、この記事において多く注目されたのは、小説作法的な部分ではなく、日記の引用であった。「秋の寺日記」で既に日記の存在は告知されていたが、その実物が読者に情報として与えられたのである。しかし、日記への過度の注目は、読売新聞の合評のように、作品と比較して評論されることに繋がった。そのため、日記引用の直後に述べられた前掲部は、看過されてしまったのではないか。言うまでもなく、日記引用と前掲記述は一組でなければならない。この「インキ壺」は、花袋が日記の書き手への思い入れを強める過程を書いたものなのであり、すなわち、同じ日記に触れることで、読者にはその過程を追体験することが期待されているからである。

花袋は日記を読み、踏査を行い、日記の書き手と同じ行動（花の採集）を取った。読者は、実際の踏査が不可能であっても、花袋の文章から疑似体験を試みることはできる。花袋はそのように仕向けているのである。目論まれたのは日記の書き手と自身との間に「深い関係」を見出すことである。それは「日の光と野の花と夕の雲と」が介在する「関係」、すなわち自然の風景を媒介としたものであった。

> 街道がある。其処に日が照る。人が通つて居る。向ふには山の翠が見える。それは年々歳々同じである。秋が来れば稲か熟（ママ）つて、里川に澄んだ水に雑魚の泳（ママ）くのが鮮かに見える。稲を満載した車がガラ〳〵と音を立てゝ通つて行く。私は其処に一『田舎教師』の歩いて行く姿を明かに見得た。

箇条書きのように羅列される点景には、意図的に特徴・詳細が排除されている。「年々歳々同じ」とある風景は、反復するものとして描写される。だからこそ、既に没した人物の姿がその風景の中にある様も、想起することができるのである。また「同じやうに野の花を採集」するなど、日記の中の動作を再現することで、死者と自分を一体化させる。

作者は、自分と小林秀三との間に「深い関係」を見出そうとする。同じ景色を見ている、と思い込むことによって一体化しようとしている。そして例によってこうした表現は、読者にも同一の連帯を、暗に促すものとなっているのだ。

『田舎教師』刊行後における、「文章世界」投書家の反応として池田清の「田舎教師を読む」（四巻十六号　明治四十二年十二月）がある。池田の評は「インキ壺」における日記公開を前提としたものである。

全体僕は文章世界に出て居た日記を見てその主人公の美しい感情の若い詩人なることを想像して居た。それに場所は利根の付近である。あの枯草や枯蘆の間を流れて行く広い然し淋しい川の姿。その河畔の草原や林。田舎教師はこれ等を結び付けて描き出されたものだらう。あゝどんなやさしい情緒が流れることだらうか。（略）残念なことには、彼が自然に憧るゝ有様、それは私があの日記を見て想像して居た方が却つて美しかつたのである。

池田は日記の引用が「天候と草花」に関する箇所であったことから、『田舎教師』という作品を「自然」の中で生きる「美しい感情の若い詩人」の物語だと認識したのである。

通に見てもらひ度い……通がつて見る……卑劣な根性！　劣等な行為！　清三は真面目な、美しい感情をもつた品性の清い青年である。それがこんな軽薄児と同一視されるとは……残念千万である。

藤森論にあるような「読まれ方」の「規制」という観点から見れば、これは失敗例ということになる。しかし、予告的記述の影響力ということで言えば、顕著な例である。池田は「利根の付近」の風景を思い浮かべることで、「清三」像を仮構するまでに至っている。恐らく花袋の意図した以上の効果がここには出ているのだが、「九州より」～「インキ壺」までの、境遇を媒介にした連帯意識が、片岡や池田のような青年の期待感を煽ったのは間違いない。

以上の概観から得られることをひとまず整理したい。

一つは、予告的記述は基本的に単なる広告なのではなく、紀行文・日記文・作法文に混入される形で提示されているということ。読者側の読もうとする自発性ではなく、記事自体の能動性により、『田舎教師』生成の目撃を持ちかけていることは、とりわけ重要なのである。

また一つは、『秋の寺日記』以後に顕著であるが、これらが『田舎教師』を例として、小説創作のプロセスを公開した、小説作法としての側面を持っていることである。「文章講壇」「文章講話」等の記事で文章・小説を指導し、四十二年六月にはそれを編集・加筆した『小説作法』を出した花袋にとって、この時期、作法の教授は常態化していたと言えよう。すなわち、これらの記事は明治四十年代の花袋の多様な立場――書き手であり、編集者というメディアの送り手であり、そして小説の指南者であるという立場が、混交した結果誕生したものなのである。

そして記述内容は、読者に連帯を要求するものである。「田舎教師」＝作品の主人公、そして作者＝花袋との、境遇や感性の蓄積。それを読んだ者の「田舎教師」化とも言うべきものを記述は狙っているように思える。作品を、単なる作品から、「僕」と「君」の物語へ転換することで、「待ちかね」る心性を養うものだ。ただし、全ての読者を、無作為に、共有圏に巻き込もうとしたのでは、恐らくない。そんなことは土台、不可能なことである。だから恐らくは、記述の中で推定読者は選別されている。それは「田舎」の風景描写だとか、「田舎」に没する「悲哀」だとか、そのような語彙によってなされているのだと思われる。

三、『田舎教師』受容の土壌

ここで、明治三十九年から四十一年までの「文章世界」を鑑みなければならない。そこにこそ予告的記述の発生経緯があるはずだからである。

『田舎教師』執筆の主要因は小林秀三というモデルの発見とするべきだが、やがて西萩花をはじめとした青年群を視野に入れることでその普遍性は強化された。このことは先に挙げた小林一郎の研究等からもわかる。そしてその青年群とは、まさしく「文章世界」投書家たちであったと見てよいだろう。

「文章世界」投書家の大部分は、さほど裕福でない地方青年たちであった。雑誌出発当初から、そこには「田舎」で無名のまま暮らすことの苦悶が縷々見られた。一巻四号（三十九年六月）「文叢」には坂内翠月「無名の花」が挙がる。野辺に咲く無名の花に自分を擬しており、選評では「清適自ら喜ぶの意気見えたり」とあるが、こうした文章を作ることで地方青年たちは自己を慰めていたのである。一方、一巻七号（三十九年九月）には十河桂舟が「小学校教師」を投書、「予の職業は、申すも恥しの小学校教師也」と境遇を嘆く。実際には、農業従事者や車夫などの職業を持つ青年たちも、自分の境遇を呪ってはいる。しかし加藤武雄もそうであったように、一定数の「田舎教師」が「文章世界」投書家として存在したのだ。

もちろん、「田舎」を肯定する地方青年も存在した。漆原深山「おらが家」（一巻八号　三十九年十月）は「実に田舎は空気が新鮮」「実に田舎は趣味が多い。実に田舎は景色が佳い」と記号的に「田舎」の美点を強調する。「文章世界」上では地方青年たちによる「田舎」の価値規定、すなわち、そこに生活していかざるを得ない自分たちという状況に対する価値規定が行われていたのである。それはどちらも、根を同じくする発想なのかも知れない。自分を、何か恵まれた、特別な存在だと思い込むから、ここにいるべきではないという考えも起これば、ここにいる蓋然性も見出そうとするのであろう。

そこに、誌上で繰り返し病身の苦しみを訴えていた萩花の訃報が掲載された。

萩花の死は「噫々萩花君逝く」と大々的に取り上げられたが、同じ号でもう一名、手塚吉重という青年の病死も報じられた。しかもこの明治四十一年六月には国木田独歩の病死と川上眉山の自死も記事になっている。花袋の中に

も、恐らく雑誌読者の中にも、死、殊に夭折の問題が色濃く染みついた時期だったはずだ。身上孤舟・加納緋蒼の自殺に関する論争が、文叢欄を賑わせもした。

これらの問題点を踏まえるとき、「文章世界」三巻七号（明治四十一年五月）の「文叢」欄は興味深い。「優等」には手塚吉重（「鐘」）と西萩花（「耶馬にかへりて」）という、後に「悲哀」の運命を辿る二人が並び、「秀逸」では中村草花（「杉植の記」）で「田舎」の風習を克明に描いた。「秀逸」にはさらに、尾知山静波の「小学教師より」が選ばれた。「小学教師をつまらぬ職業のやうに考へてゐる人たち」に対する反論であり、「田舎」に生きる運命を肯定し、教職を礼賛する（傍点原文ママ）。

僕は生活に疲れて都会を逃れたのでも何でもなかつたが、平和な田舎は僕を永遠にとどまらしめねばやまぬ、つまり僕は田舎に生れて田舎に死ぬべき運命に生れたのだらう。そして、僕は年一年と、小学教師がいかにも貴い美しい職業であると感ぜられるのをよろこんでゐる。

草花・静波ともに、常連投書家である。詳しく論じる紙幅はないが、草花は田舎での生活を諦観混じりに受け入れようとした青年であり、静波は右の通り肯定しようとした人物で、「文章世界」上のアンチ・メリトクラシーの型として注目に値する。あるいは自殺し、病に斃れる者もいる裏に、同じく田舎に埋もれることを意識しながらも、生活のために納得しなければならない青年たちもいた。彼らは各々、その許容の形を言語化して投書していた。

花袋がこれらの投書を目にし、地方青年という読者層のありようを掴んでいったことは、例えば投稿小説の傑作選『二十二篇』(14)の巻頭言において、

その中には、田舎のさびしい町の一室で、凩の吹き荒れるのを聞きながら筆を執つた人もあれば、雪の降り頻る山国の寒い村落で、都会にあくがれて作に耽つた人もあつた。

などと、作者像を語っていることからも伺える。〈書く〉行為のイメージは、「田舎」の寂寥と都会へのコンプレック

スと接続されていったのである。

「文章世界」の誌上には既に、「田舎」、無名、教師、夭折などの『田舎教師』の要素が出そろっていた。そして花袋はそれらを逐一目にする立場にあった。『田舎教師』はこうした状況のフィードバックなくして成立し得なかっただろう。

それは、彼らのための物語だとも言えた。花袋は小林秀三の日記を発見したとき、「志を抱いて田舎に埋もれて行く多くの青年たちと、事業を成しえずに亡びていくさびしい多くの心とを発見」し、「『田舎教師』の中心をつかみ得たやうな気がした」と述べている。この時、確かに花袋は誰も小説化したことのなかった地方青年の「心」を「つかみ得た」[15]と言っていい。そうした確信を、「文章世界」上の投書を目にしつつ固めていったのが、花袋の明治三十九年から四十一年頃だったのであろう。予告的記述はその上に成り立ったもので、そのために記述内容は「さびしい多くの心」――「無名」の死を恐れ、都会へのコンプレックスを持ちながら地方で生きる青年たちを対象としたものとなったのである。「一つ間違へば、そうした運命に邂逅さぬとも限らなかつた」者たちこそ、『田舎教師』の読者として想定されたのである。

四、読者層の形成

ここまで述べたように、花袋はいわば、「文章世界」誌上で需要をリサーチしていた。だとするならば、予告的記述は、その上で顧客層を選別する役割――今日のマーケティングの一環である、セグメンテーションないしターゲティングに相当する――を託されたと言えよう。あるいは、商品を投入するまでに消費者の購買意欲を高めておくプロモーションと言ってもよい。花袋はこれらを理論的にではなくとも、ある程度自覚的に行っていたように思われる。

もっとも、書籍を購い、読む人々を増やす――それ自体は通常の広告と変わりはない。予告的記述がやや高度なプロモーションであるということとは別に、恐らく花袋には、自作にふさわしい読者を養成する意図があった。『小説作法』の中で彼は「読者の中には、自分に似たことでないと、興味を感じない読者がある」「改善された読者が欲しい」と漏らしている。「作者と同じやうな心地を以て作品に向つて呉れる読者が確かに欲しい」[16]と述べる彼にとって、作者―読者間の齟齬は苛立ちの種であった。その点において、「文章世界」内言説のフィードバックとして完成された『田舎教師』は、これまでと異なる読み方が期待されるものであった。

『田舎教師』関連記事を、解釈の方向性を誘導するものと捉えることはできる。しかしそれ以前に、ある形で『田舎教師』を読みたいというような心性は、「文章世界」誌上において醸成されていた。花袋は彼らが待ち構えていた物語を提供したわけである。『田舎教師』が青年たちとの相関によって産み出されたことはもっと重視されてよい。してみると、繰り返し「田舎教師」―読者―花袋を横並びにさせようとする予告的記述、その役割とは、相関を青年たちに意識させることではなかったか。

「文章世界」という場が、文学青年たちのコミュニティーとして機能していたことは言うまでもないが、そこに生まれた一部のグループ、前章に述べたような一団に花袋は着目したのだ。少なくとも花袋は、そのような読者がいることを想定していた。彼らの「田舎」者としての意識、不遇な自己という意識を助長することで、『田舎教師』の読者層を形成しようと意図したのではないか。それは畢竟、「自分に似たこと」に「興味」を示す読者でしかないのだが、少なくとも反感的な読者ではない。読者の側で共感的な読みが偏重されるのであれば、ともかく共感そのものを作り出すことで対応が可能である。予告的記述が形成した回路は、このような試みに由来するのではないか。

連帯の回路の中には花袋自身も組み込まれている。これは重要なことである。花袋は自分が青年たちの仰望・羨望の対象であることを承知していた。『田舎教師』本文において作者自身をモデルとした原杏花なる人物が登場するが、

原は主人公たち青年の「この上もない羨望の種」[17]とある。青年から向けられるこうした眼差しとその自覚は、作品内時間の明治三十六～七年のものというよりは、「文章世界」に関わり『蒲団』の成功を経た明治四十年以後の感覚に近いと思われる。ともあれ、自らが真っ先に同調することで、「田舎教師」というグループへの相乗りを促していったわけである。

いわば彼らを、『田舎教師』の読者として目覚めさせていったわけだ。それはひとつの転倒の過程である。「秋の寺日記」で「無名」が有意味化されたように、「田舎」で生きる不遇な生にこそ、都会の立身出世物語にはない「意味」があるというような。また、こう考えたとき、予告的記述が小説作法としての性格を有していることもまた、興味深い。〈書く〉営為によって作者と読者が連帯を強めるとき、〈書く〉者だからこそ読者になり得るという現象が起こっているからだ。〈書く〉ときに、彼らは立場を転倒させる。『田舎教師』の清三も、やはり文学青年であった。「文章世界」において花袋が見出した、「風の吹き荒れるのを聞きながら筆を執」る人々は、『田舎教師』そのものだった。そんな青年たちこそ共感的な読者となると踏み、予告的記述は著されたのである。

注

(1) 佐久良書房より明治四十二年十月二十日に刊行

(2) 田山花袋「『田舎教師』」（「東京の三十年」――『定本花袋全集』第十五巻所収　臨川書店　平成六年六月）（初出＝『東京の三十年』博文館　大正六年六月）六四八頁

(3) 片岡鉄兵「文学的紀行」（「文学界」第五巻第六号　文藝春秋社　昭和十三年六月）

(4) 村田犀川「新刊を読みたる後」（「新声」第二十巻十一号　隆文館　明治四十二年十二月）八九頁

(5) 「『田舎教師』合評」（「読売新聞」明治四十二年十一月七日別刷　読売新聞社）七面

(6) 藤森清「『田舎教師』の自然描写」（『語りの近代』所収　有精堂　平成八年四月）四〇頁（初出＝「名古屋大学国語国文学」七十号　名古屋大学国語国文学会　平成四年七月）

(7) 大井田義彰「〈無垢なるもの〉の功罪をめぐって――田山花袋『田舎教師』試論――」（「東京学芸大学紀要　第二部門　人文科学」第五十一集　東京学芸大学　平成十二年二月）二八五頁

(8) 前掲「文学的紀行」二八四頁

(9) 教育出版センター、平成四年三月

(10) 加藤武雄『悩ましき春』（初出＝「福岡日日新聞」大正九年九月七日～大正十年二月十二日、初刊＝新潮社・大正十年六月一日、引用は復刻版＝昭和書院・昭和六十三年五月）

(11) 和田敦彦『メディアの中の読者―読書論の現在』（ひつじ書房　平成十四年五月）一二三頁

(12) 他、島崎藤村・正宗白鳥・蒲原有明・小山内薫・相馬御風・長谷川天渓・中村星湖・西村渚山・吉江孤雁・前田木城が寄稿。

(13) 「仙子」とは水野仙子である。「文章世界」への投書を激賞されたことを動機に上京、花袋に弟子入りしていた水野は、当時投書家たちの注目の的であった。

(14) 花袋選『二十二篇』（東雲堂書店、明治四十三年一月）

(15) 前掲(2)

(16) 『小説作法』発刊にあたり新たに書き起こされたもの。引用は『定本花袋全集　第二十六巻』（臨川書店　平成七年六月）二八〇・二八三頁

(17) 『定本花袋全集　第二巻』（臨川書店　平成五年五月）四〇一頁

※引用は原則として、漢字を新字に改め、ルビを適宜省略した。

――大学院文学研究科博士課程後期課程――